

# 戦後復興の礎 太田川放水路の要

# 大芝・祇園水門



百年の大計である太田川放水路建設は、昭和9（1934）年から始まった広島を水害から護るための大事業でした。太田川の洪水流量は毎秒6000 $\text{m}^3$ と考えられていましたが、広島デルタを流れる川の疎通能力は2000 $\text{m}^3$ 程度でした。このため嵩上げ、拡幅あるいは放水路の開削が検討され、経済的、都市計画上の見地から放水路案が決定されました。

戦争による中断を余儀なくされたものの、昭和32年から2カ年にわたって分流点付近の堰防法線、分流点付近の計画高水位、堰、水門位置、構造検討の模型実験が行われた結果、市内派川側には引上扉式水門（有効幅員40m）及びクリーガー形式溢流堤が決定されました。当初、放水路側は固定堰でしたが、1. 平水配分 2. 塩水楔の上流伸長 3. 河川浄化 の必要性が生じたため、流量配分を行える可動堰（祇園水門）に設計変更されました。

市内派川への分流堰（大芝水門）では、水門を左岸に、溢流堤を右岸に設置されています。これは右岸に水門をおくと流頭部の流速を助長し、河床及び構造物の維持が困難になること、また左岸に水門をおくことは流況の水裏にあたり、流木等の漂流物に対しても安全で、かつ現況の平水が左岸寄りに流れている点から決定されました。

広島市東区牛田町で市内派川と放水路に分流した太田川は、平常時には市内派川に維持流量を流すため大芝水門は全開にされ、祇園水門でゲートの操作が行われます。一方、洪水時には祇園水門を全開にして、大芝水門のゲートを操作することで、洪水流量毎秒6000 $\text{m}^3$ を太田川（放水路）と市内派川に2対1の割合で流れる水量を調節します。このとき、祇園水門はゲートを全開にし、大芝水門のゲートを操作して洪水を制御します。

このように祇園水門及び大芝水門は広島市街地を洪水から防御すること、そして太田川、旧太田川の流水の正常な機能を維持するための目的で操作管理されています。



祇園水門着工当時（昭和37年）



可動堰全開の祇園水門（昭和47年7月豪雨時）



上流左岸から見る祇園水門



下流左岸から見る大芝水門



太田川放水路の要「大芝水門と祇園水門」（平成27年）  
太田川から市内派川への分岐となる大芝水門（左）、放水路への分岐祇園水門（右）から下流を望む。